



馬耳東風

少し前の話になるが、インドの人口が中国を抜いて世界最多となった。その数14億2千万人強。今まで最多を誇っていた中国は出生率が近年急速に低下し、昨年には人口が1961年以来初めて減少に転じた。それでも約70年以上にわたり両国で世界人口の3分の1以上を占めてきたと言うことはいまさらながら驚きに値する。

そしてその人口構成は、2022年時点の平均年齢（中央値）がインド27.9歳、中国38.5歳、いずれも日本の48.7歳と比較して圧倒的に若い。

そして2年後の2025年、わが国はついに国民の約3人に1人が65歳以上、約5人に1人が75歳以上となる超高齢化社会を迎える。いわゆる2025年問題であるが、このまま行けば筆者もこの3人に1人のグループに仲間入りすることとなり、正直その思いはかなり複雑である。人類史上未だ未経験の社会をどのように生きたらいいのか。

そのようなことを考えながら6月末から7月にかけてインドネシアと中国を訪問してきた。まず最初に感じたことは両国だけでなく、世界で今まさに起こっていることをわれわれはどれだけ理解しているのかということである。つまりいかに一次情報を把握しているか、判断・思考が新聞やメディアの報道頼みになっていないかを考えなければならない。世界は無理としても隣国の中国をはじめとしたアジア各国のありさまはしっかり頭に入れておきたい。これまで獣医師会の担当として海外とは比較的交流を持ってきたつもりだが、約3年間のブランク後のコロナ明けに両国を訪問してみて強烈に感じたことがある。それは「若い、早い！」である。今回トータルで7回ほど会合に参加したがそのメンバーのほとんどが

20代、30代、40代は行政の課長クラスで何人いたかいなかったかというレベルである。もちろん50代以上は皆無であった。そして何より打ち合わせにおいて迅速な判断が求められることも強く感じた。「持ち帰って後ほど回答します」などという、某キャッシュレス決済サービスのテレビコマーシャルのごとく「じゃあ、いいです～」と言われかねない。グローバル対応が急務な今、旧来のわれわれのやり方がどこまで世界で通用するのか真剣に考える必要性を感じる。そしてこの「若い、早い！」を支えるのはまさしく社会のデジタル化であろう。今回の中国訪問で、スマートフォンがなければ生活できないと言う日常を身をもって体験した。自販機でジュースを買うことも、鉄道に乗ることも、身分を証明することもスマホがなければできないのである。したがって老若男女全てがスマホを必死に利用し、使えないなどと言うことは許されない現実をまざまざと見せつけられた。決して大げさに言っているのではなく、デジタル化を社会機能の中心におき、それを徹底する覚悟は見習うところが大きい。

昨今のマイナンバーカードの混乱ぶりが示すように、社会のデジタル化においてすでに世界の中で周回遅れと言われているわが国、ここからどう巻き返していけばよいのだろう。

さて、10月27日～29日、第11回FASAVA (Federation of Asian Small Animal Veterinary associations)の年次大会がインドのムンバイで開催される。

<https://fasava2023mumbai.com>

コロナ禍の影響で4年ぶりの開催となる本大会、アジアにおけるわが国の立ち位置の確認、未来に向けての戦略をしっかりと考えながら参加したいと思う。

(も)